

修道誓願 23 年

イ：インタビューー 敦：マリア・クララ敦子

イ：こんにちは、シスターの洗礼名、Firstname、今の使徒職を教えてくださいませんか。

敦：マリア・クララ敦子です。中学・高等学校で国語と宗教を教えています。

イ：修練期が一緒だったシスター敦子との印象的な思い出は、1~2 時間の立ち読みで、一冊の本を読んでもしまい、その内容をきちんと要約して話せるという才能でした。本屋さん泣かせだなと思ったのを覚えています。

敦：小さいころは、とてもどんくさい子だったんです。黙っていて、おっとりしていて、不器用で…。いい例が、幼稚園のお弁当の時間でした。食べるのが遅くて、クラスのみんなから、一人遅れをとっていました。取り残されていることにいつも淋しさを感じ、頑張りたい…とは思っていたのですが、なかなかできなくて。大人になってから、霊的同伴者に「自分のことをそういう（どんくさい）人間だ、と決めていませんか？」と言われたこともあります。

イ：そうですね。子ども心に生きづらさを感じていたのかもしれませんが。学生時代は、どんなことに熱中していましたか。

敦：勉強は好きでした。先ほど話題に上ったように読書です。それに関連して、お芝居や宝塚歌劇（当時学生は 800 円ほど）、映画やコンサートにも行きました。あとは逆に、自分が苦手なスポーツに憧れがあって、早慶戦の観戦もしていました。

イ：ずっと前から、シスター敦子は勉強だけでなく、興味の守備範囲がかなり広いなと思っていましたが、そういう歴史があったんですね。修道院に入る前、何かアルバイトやお仕事をなさっていましたか。

敦：コーギーコーナーでケーキの販売を、進研ゼミの赤ペン先生もしていました。その後、高校の教師になりました。

イ：ケーキ屋さんのアルバイト…シスター敦子も、女子大生してたんですね。ところで、生まれてすぐに洗礼を受けられたと聞いていましたが、物心ついてから、「シスター」という存在にどんなイメージを持っていましたか。

敦：すでに、「シスター」という人たちと出会っていましたので、明るくて優しい、親しみやすいという感じを持っていました。

イ：コングレガシオン・ド・ノートルダム修道会（以下 CND）のシスターと初めて出会った時、どんな印象を持ちましたか。

敦：私は、北九州の小学校（明治学園）を受験した時、初めて CND のシスターにお会いしました。今は亡きシスター薩摩美奈子とシスター木村益子です。お二人とも笑顔の素敵な方で、優しそうだなという印象でした。

イ：小さいころからシスター（修道女）方が身近にいらっやっと思ったと思いますが、なぜ、ご自身がシスターになろうと思われたのですか。

敦：きっかけは、小学校 2 年生くらいの時です。「シスターは、自分の家族がいなくて寂しくないの？」

と、シスターに伺いました。すると、「私には、みんなが家族や子どもなのよ」という応えが返ってきたんです。子ども心にこの応えに感動して、「いつか私もシスターになる」と思いました。以来、私の中に、大人になってボーイフレンドができて、この思いが頭の片隅にいつもありました。

イ：小さい時に味わった感動は、ずっと残っているものですね。でも、他にたくさんある修道会の中で、どうしてCNDに決めたのですか。

敦：妹たちが、別の修道会の学校に行っていましたから、他にも修道会があることは知っていましたが、私にとってシスターになるということは、CNDのシスターになるということだったんです。

イ：ご家族は、みなさんクリスチャンですから、シスターになることには、ご理解があったんでしょうね。

敦：いいえ、両親は反対しました。特に母とは、東京の修練院に旅立つまでの4~5カ月、ほとんど会話がなくなりました。ところがその頃から、私に作ってくれるお弁当のおかずが、好きなものばかり入っているようになったんです。これが、母の「好きな道を歩みなさい」のメッセージだったのではないかと思います。自分に似て頑固な娘は、決してその意志を曲げないことを知っていたのでしょうね。父は、最後まで反対を押し通しました。自らも修道生活を考えていたほど信仰が厚く、修道者は、「厳しく徹底した清貧を生きるもの」と思っていたからでしょう。それが、娘の私にできるはずはない、と心配していたのかもしれませんが。ただ私の中では、どんなに反対されても、「私ではなく、神様が私を選び、ご自分のために生きるのを待っていらっしゃる」という不思議な思いがありました。

イ：そうですね。こういう生き方を理解していただくまでは、長い道のりの中で、私たちが本当に幸せであることを、家族の方が肌で感じ取られるまで待つしかないのでしょうか。修練期に一番うれしかったことや悲しかったことは何ですか。

敦：嬉しかったのは、修練院の仲間に入れられていたことです。ある遠足の朝、喧嘩をして、一旦部屋に戻り、大泣きました。その後、再び合流した時、みんな何事もなかったようにすっと入れてくれて。朝ごはんが食べられなかった私に、サンドイッチを作って持ってきてくれていたことも忘れられません。悲しかったことは、いつも自分の弱さ、無力さに直面させられたことです。心の中が、ガラス張りようになっていて、全部見せられてしまい、小さいころのどんくさい私に行きついてしまいました。ところが、もうやっていけないと思った瞬間、同時に神様がひょいにご自分の方に持ち上げてくださったんです。どん底から歓喜へという不思議な経験でした。

イ：修練院での生活は、寮生活やシェアハウスとも違う、ましてや仲の良い友だちとの生活でもない。神様に集められた、という一点だけが共通の生活。特別（喜びも悲しみも共に味わう）な所ですね。修練院を終えて、最初に直面した困難は何でしたか。

敦：何しろ共同体生活、使徒職（桜の聖母学院）のすべてが新しく、その中で祈りの時間を確保するのが大変でした。また初誓願直後、父が病に倒れ、実家（北九州）に帰らせていただいたのですが、間もなく任地の福島に行かなければならなくなり、遠く離れて何もしてあげられなくなったことです。

イ：辛い時でしたね。では、20数年に及ぶシスターとしての生活の中で、一番苦しかった時をどう乗り越えられましたか。

敦：使徒職の場で壁にぶつかった時、本当に苦しい思いをしました。そんな時、修道会は、私に国際共同体（カナダ）というチャンスを与えてくださったんです。ここでの生活で、心理的・霊的同伴をしていただきながら、神様と私、姉妹（他のシスター）と私の関係を取り戻し、少しずつ変わっていくことが出来ました。

イ：今、修道生活に感謝していることを聞かせてください。

敦：人や物事を見る時、神様はこの人を、この出来事をどう見ていらっしゃるのか、という視点が育ってきたことです。私が気に入ろうが入るまいが、神様がこの人を愛していると感じた時、自分の感じ方も変わる体験をしています。

イ：では、CNDの未来について、これから入会してくる新メンバーをどんなふうに迎えたいですか。そして、何を期待しますか。

敦：創立者聖マルグリット・ブールジョワ（以下 M.B.）は、新しい志願者を喜んで迎えていました。私も同じように「あなたが来てくれて嬉しい」と迎えたいですし、一人の大人として関わりたいです。M.B.は、ご訪問の聖母を慕う祈りの人でした。祈りに基づく機動力があり、誰にでも分け隔てなく接し、必要などころにはどこにでも出かけていける人であってほしいです。

イ：聖書の座右の銘と M.B. のどんなところに惹かれているのかを教えてください。

敦：『求めよ、さらば与えられん』です。

M.B. は、決断して思い切って出かけていく。そこに神様がいてくださるから…というところですか。

イ：最後に、もう少し話しておきたいことはありますか。

敦：最近、入院、手術の経験をしました。その時、同じ病気の方たちと親しくなったのですが、中には大変な状況の方もいらっしゃいました。病友のために祈っていて、「なぜ、私ではなく、あなたが？あなたは代わってくださったのだ。」という神谷美恵子さんの詩を思い出しました。そうだ！だから、私には、しなければならぬことがある、と。自分の一日は、全くの恵みとして与えられた一日。主と共に、この日を生きることが、私への神様の望みだと思っています。

イ：ありがとうございました。シスター敦子が、今とても幸せであることが伝わってきました。私も神様の力を借りて頑張らないと！



インタビュアー：シスター高橋香久子
シスター高橋もと子